

Title	嵯峨隆君学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1994
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.67, No.7 (1994. 7) ,p.156- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19940728-0156">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19940728-0156</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 嵯峨隆君学位請求論文審査報告

本論文は、その題名の示すとおり、わが国における最初の体系的な近代中国アナキズム研究の成果である。本論文に一貫して流れる著者の問題意識は、以下の二点に要約される。

第一は、思想の遭遇・移転の問題である。西洋社会で生れた外来思想としてのアナキズムが中国に移転され、伝統思想に遭遇するとき、その受容過程で思想は部分的に選択され、再解釈される。嵯峨君は、思想家の生きる社会が直面した政治的課題と固有の伝統がこの受容過程を拘束すると想定する。伝統は、一面では現状を固定化するとともに、他面ではその再解釈を通して現状を批判する機能をも有している。本論文は主として後者の側面を重視する。さらに伝統は、「外在化された伝統」と「内在化された伝統」に区分される。「外在化された伝統」とは、思想家の知的営為の外部にある伝統的な国家、社会制度、文化遺産としての伝統的学術体系などを含む。それに対して「内在化された伝統」とは、思想家が社会化の過程で修得した、中国に受け継がれてきた思考・判断の様式である。それは主として伝統的価値と外来の価値を対置する「体用」の論理、「民を政治の客体と見なす士人意識」、聖人の教えを修め経世済民に役立てようとする態度、「外来の事物を伝統的概念によって説明

する傾向」などからなっている。

本論を貫く第二の問題意識は、二〇世紀初頭の辛亥革命、およびそれに続く国民革命の時期において、アナキズムが、党派の別なくさまざまな若い中国人革命家を魅了したかということである。従来、中国アナキズムは、後年にいたりそれと対立した中国国民党ないしは中国共産党の立場から分析・評価され、それ自体の研究はほとんど行われてこなかった。したがって、たとえ行われたとしても研究成果は少なく、その評価は国共両党の路線と運動を軸にすえた、おおむね否定的なものであった。嵯峨君はこのような風潮を排し、アナキズムの思想と運動それ自体の分析に取り組んだのである。そうすることが、今日においては一見非現実的に思われるアナキズムがなぜ当時の革命家を牽きつけたのかを解明する鍵だからであり、さらにはそこに内在する問題が現代中国の政治を理解する一助となるからである。

アナキズムは、早くは一九世紀末康有為・梁啓超らの改良派の運動のなかで中国に紹介された。しかし、それが本格的に運動として展開するのは、一九〇七年に東京とパリにおいてそれぞれのグループが『天義』と『新世紀』という二つの刊行物を発行して以後のことであった。これら第一世代のアナキストたちは、辛亥革命を通して生れた中華民国という共和国の政治と国家権力にいかに関与するかという問題に直面した。そこで、一九一〇年代において、第二世代のアナキストが第一世代の

人々の権力へのかかわりを批判して登場してくる。第三世代のアナキストは、第二世代がマルクス主義者との論争に敗れた後において、一九二〇年代にアナキストとしての自覚をもちつつ教育運動にたずさわった人々であった。本論文の主要な分析対象は第一世代のアナキストにあり、第二世代も第一世代に対する批判者としてとりあげられる。

嵯峨君の論文構成は左記の通りである。

- 序章 近代中国とアナキズム
- 第一章 近代中国アナキズム概説
- 第二章 中国アナキズム前史―暗殺と破壊の時―
- 第三章 文化的保守主義者の革命幻影―劉師培―
- 第四章 科学とアナキズム―李石曾―
- 第五章 士大夫的欧化主義者のアナキズム―呉稚暉―
- 第六章 革命から改良へ  
―民国初年の第一世代アナキスト―
- 第七章 革命の求道者―劉師復―
- 第八章 結論

序章と第一章は本論文の全体像を提示している。それは、嵯峨君の研究の出発点であるとともに研究成果の核心でもある。序章において同君はまず、伝統の革新の問題を論じる。それは

この論文の基本的視角であり、すでに本報告の冒頭で言及したところである。序章のいま一つの問題は、アナキズムの何が民族的危機に瀕した中国の知識人に訴えかけたのかということである。嵯峨君は、生存競争を強調する進化論に対し「人間の連帯性と社交性の感情もしくは本能に基づく相互扶助の精神を進化の要因」と考えるクロポトキンのアナキズムが、『群』（集団）の内部における相互扶助を前提としつつ、現在の劣勢を挽回する可能性」を追求する中国の知識人の心を捉えた、と結論づける。ここにおいて、本来困境をも否定するアナキズムが、民族主義と結合し、中国特有のアナキズムが成立するのである。この立論は、冒頭で言及した第二の問題に対して包括的解答を与えているといえる。

第一章では、本論文でとりあげられる劉師培、李石曾、呉稚暉、張継、劉師復らの思想的核心的部分が簡潔に要約されている。それ自体がすぐれた中国アナキズム論である。以下、各論に移ることにしよう。

第二章でとりあげる中国アナキズム前史とは、一九〇七年に東京とパリで中国人アナキストが雑誌を創刊し、本格的な宣伝活動を始める前の時期を指す。この時期にすでにバクーニン、幸徳秋水らの欧米と日本のアナキストや社会主義者の著作が翻訳・紹介され、かつまた断片的ながらロシアのナロードニキなどのニュースが中国に流入してきていた。康有為らの改良派の人々は、その思想には同調しないものの、ナロードニキのテロ

リズムなどの急進的手段に大きな関心を示していたことが指摘される。

革命派にあつては、単にアナキズムの手段だけでなく、その思想に対してもより深い理解を示し、中国同盟会の機関誌『民報』にもアナキズムに関する論説が登場した。その論客のなかには張継、劉師培、廖仲愷らの名前が含まれている。嵯峨君が、すでにこの時期にあつて排滿革命論と本来国境を否定するアナキズムとの思想上の葛藤を指摘していることは、その後の中国アナキズムが直面しなければならなかった最大の問題を示唆しているという点で注目されてよい。

第三章は、一九〇七年に東京で『天義』を発行して活動したアナキスト集団の指導者、劉師培（一八八四年～一九一九年）の思想をとりあげる。劉師培は、その生涯において排滿民族主義、アナキズム、君政復古主義を遍歴した特異な思想家であつた。しかも、彼が本格的アナキストとして活動したのは、一九〇七年からわずか一年余りの期間であつた。それにもかかわらず劉は近代中国政治思想史にアナキストとしての足跡を残しているのである。嵯峨君は、劉師培のアナキスト時代の思想を中心にとりあげ、君権主義時代から遡及して劉を反動主義者として否定的に評価する従来の立場を排し、むしろ転変する政治的・思想的立場の中に一貫性を発見しようと試みている。

劉師培は、春秋左氏伝の研究を家学とする江蘇省揚州府の学者の家に生れる。劉もまたこのような家庭的環境のなかで中国

の伝統思想を修めるのであるが、彼の学風は孔子・儒教を絶対化することなく、各流派の伝統思想の優れた点をとり入れたことにあつた。嵯峨君がこの点に注目し、劉が優れた伝統思想の学識を有しながら、外来の西洋思想を受容する可能性のあつたことを示唆している点は、やがて来るべきアナキズムの受容との関連において評価されてよい。

劉師培の排滿革命論の起点が一九〇三年にあつたと、嵯峨君は考える。劉はその古典の素養に基づいて漢民族と滿州民族の区別を明確にし、滿州民族による清朝の支配の不当性を攻撃する民族主義革命家として登場した。その限りにおいて、中国の伝統的學術は劉の政治的・思想的立場の支柱であつた。かかる立場を實踐に移すために、彼は「修身・立志・實踐」の一連の過程における人間意志の働きを重視した伝統的な「実践的倫理観」を提示していた。著者の指摘のなかでいま一つ注目すべき点は、劉師培が排滿革命論の後に来るべきものとして共和政体の国家権力を想定していたということである。したがって、劉の立場はこの枠組みのなかでは国家権力を否定するアナキズムと相容れないものであつたが、手段としてのテロリズムを賛美する傾向があつたということである。

劉師培のアナキズムへの転換は、ひとまず一九〇七年日本において妻の何震とともに『天義』を創刊したことをもって画期とすることができる。嵯峨君はこの転換への過渡期に内在する劉師培の微妙な思想的矛盾に分析を加えている。ここで著者は、

アナキズムの一般的特徴を、「人間を社会の支配服従関係から解放し、徹底した自由と平等を享受せしめる思想であ(り)——この自由と平等の徹底化を矛盾とは見ずに、人間の理性が最終的に両者の調和を実現させる」思想ととらえている。

嵯峨君は劉師培の「アナキズム思想を体系的に紹介し、その特徴が平等主義の強調と諸悪の根源が政府の存在にあると考える点にあったと主張している。かかる劉の思想は、直接的には、農業の保全を重視するトルストイの「農本主義的アナキズム」とクロボトキンの相互扶助に基礎をおく集団主義的アナキズムに由来することを明らかにする。しかし、著者の劉師培研究のもっとも重要な貢献は、かかる外来思想が中国的条件によっていかに形を変えるかという点を明らかにしたことである。その一つは、劉が滿州政府を打倒すればアナキズムの目的は達成されるとして、排滿民族主義とアナキズムは両立しようと説いたことであった。いま一つの問題は、アナキズム受容における伝統思想の問題であった。その特徴は、西洋アナキズムを、それ自体ではなく、中国の伝統思想によって正統化しようとしたことである。一例をあげれば、劉師培は、「徹底的に権力と階級を否定し、絶対的な平等を実現」しようとするアナキズムの理想社会を提示するにあたり、西洋アナキズムに依拠しつつも、それを中国の伝統的理想社会である大同社会に同定することによって正当化しようとした。さらに、かかるアナキズムの理想社会においてのみ伝統的學術の保存が可能であると劉は考えて

いた。ここに著者は、文化的保守主義とアナキズムの政治的進主義の結合を見出し、文化的保守主義を劉の転変する政治的立場を一貫して流れる基本的要素として設定するのである。

劉師培は、このような思想を一九〇七—〇八年に日本で実践に移した。それは主として啓蒙的活動であった。社会主義講習会の開催、『大義』などの雑誌の発行がそれである。嵯峨君は「亞洲和親会」の主張を重視し、そこに反帝国主義的民族主義とその延長線上に国際的連帯を見出し、それが当時の中国の革命派の主張のなかで独特なものであると評価している。

しかし劉師培は、一九〇八年末突如革命運動を離脱し、清朝のスパイに転向した。嵯峨君はこの転向の過程を跡づけているが、本章の流れとの関連で注目すべきはその論理である。著者は、劉が伝統的學術の衰退を嘆き、その振興のために清朝の高官・端方に救済を求めたことを明らかにしている。その政治的節操の可否を別として、嵯峨君はそこに文化的保守主義者としての劉師培の一貫性を見出している。一九一五年に劉が袁世凱の帝制を支持する籌安会に名を連ねたことは、文化的保守主義者の行きつくく末であった。

以上のように、劉師培の変転する政治的・思想的立場を、一貫する文化的保守主義でとらえた研究は嵯峨君の研究をもって嚆矢とするものであり、高く評価されてよい。つぎに、パリのアナキストに移ることにしよう。

嵯峨君は第四章において、一九〇七年にパリで『新世紀』を

発行して活動を開始した中国人アナキストの指導者の一人として、李石曾(一八八一年〜一九七三年)をとりあげる。李は清朝官僚の名門に生れながら、青少年期の教育は中国の伝統思想から相対的に自由であった。このことが、一九〇二年の渡仏後西洋思想、とくにアナキズムの受容の方向を決定づけたのである。

嵯峨君は、李石曾に影響を与えた思想として唯物的科学主義、進化論、クロポトキンの相互扶助論をとりあげる。李は西洋の科学知識を重視し、「物質のみが宇宙の唯一絶対の現実を形成しており、思想や意識は単なる副産物に過ぎず、物質を除いて真実は存在しない」と考えていた。したがって、人間、社会、革命もかかる物質的世界の一部であった。李はさらに進化論の影響を受け、革命や人間の発展を、「絶対自由・絶対平等の實現に向かつて、永遠に続くものと捉え」た。しかし彼は、中国の滅亡につながる「優勝劣敗」、「適者生存」の法則を拒否した。かかる点を補ったのが、クロポトキンの相互扶助論に基づくアナキズムであった。

かかるアナキズムに基づいて李石曾はその政治的主張を展開した。彼は反軍国主義、反祖国主義を唱え、民衆を抑圧する政府・国家の権力に反対した。この点において、李石曾は当時の中国の排滿共和主義者と異なっていた。それでは、李石曾の立場は当時の中国人革命家が直面していた排滿民族主義と相容れなかつたのであろうか。それに対する嵯峨君の回答は、李石曾

のなかに見出される「較善」(比較的善きもの)の概念であった。すでに言及したように、李は革命を絶対的善に達するための不断の過程であるとしてとらえていた。したがって、現実の革命運動が究極的目標に向かっていると考えられる限り、その過程は「較善」として肯定された。かくして、排滿民族主義もアナキズムの理想社会に連なると考えられる限りにおいて、容認されたのである。李石曾のアナキズムは、その他に教育を重視し、女性解放を唱えた点に特徴があった。いずれにせよ、彼の伝統からの相対的に自由な立場は劉師培と好対照を示している。第五章でとりあげる呉稚暉は両者の中間にあった。

呉稚暉(一八六五年〜一九五三年)は、伝統的知識人として出発し、改良主義を経て革命派に転じ、アナキズムを受容した清末民初の知識人であった。彼は一九〇三年にイギリスに渡り、一九〇五年中国同盟会に参加、一九〇六年にフランスへ行き、李石曾らとともにバリでアナキズム運動を展開した。

呉稚暉は、人間を抑圧する一切のものを「野蠻」ととらえ、それを否定する。彼は、その延長線上にアナキズムを受容したのである。したがって、公的制度としての国家・政府、議会など、および私的制度としての家庭、結婚などが否定の対象であった。かかる否定の上に立って呉稚暉が理想としたのは、「科学の発展に基礎を置いた共產主義社会」であった。彼にとって科学の「真理」に従うことが「善」であり、人間社会は「較善」、「更善」を経て「至善」に至ると考えられた。さらに呉稚

暉は、中国の停滞を打破するために進化論を受け入れた。しかし、彼の進化論に対する考え方は、進化の動因を「生存競争による自然淘汰」に求めるダーウィンのものよりも、「自分たちをより高い水準に高めようとする、意識的な競争による『知的淘汰』」に求めるラマルクの発想に近いものであった、と嵯峨君は断定している。かかる文脈において、クロポトキンの相互扶助的アナキズムが適合していたのである。

以上のように見る限り、呉稚暉は西洋の思想を直接的に受け入れた。その態度は、逆に中国の伝統思想批判に向かうのである。その意味で、嵯峨君の言葉を用いれば、少なくとも「外在化された伝統」は否定されることになる。それにもかかわらず、本章の重要な点は、呉のアナキズム受容にあたり、「内在化された伝統」としての伝統的思考様式の残存を指摘していることである。例えば、進化論受容の背後には、孟子の言う人間の「善性」＝「良徳」の拡大が「進化」であり、「仁」に通じるという伝統的な思考様式があった。また、呉はアナキズム達成後の絶対的平等社会における伝統学術の隆盛を期待していた。さらに著者は、呉の変革思想に一貫して流れる、自らの修養によって模範となり、聖人に至る士人意識の存在を指摘している。そこでは、知識人による上からの改革、教育が重視されたのである。

しかし、迫り来る革命は、本来反政治主義的であるべきアナキストに、現実の革命にいかにかかわるかという問題を提起す

ることになった。辛亥革命の課題の一つは排滿革命論であった。その目指すところは、種族革命に非ずして皇帝の排除であり、革命後に立憲共和制が想定されていた。これらの目標は、呉稚暉にとって、いずれも究極的なアナキズムの理想世界にいたる「較善」の状態として肯定されたのである。

辛亥革命のいま一つの課題は、列強による中国分割の危機への対応であった。嵯峨君の分析によると、呉稚暉には反帝國主義の意識は希薄であり、危機の眞の要因を国内的状況に求めている。つまり、その最大の原因が、国を支える民衆の意識水準の低さにあったのである。したがって、そこで必要なものは、「共同、博愛、平等、自由などといった真理公道が包含する道徳と、科学実験などの知識」からなる「教育」であった。著者は、革命の世論形成における知識人による教育を重視する呉の考え方の中に、伝統的士人意識を見出している。

呉稚暉は同盟会の一員として、抵抗の手段としてテロを含む暴力を肯定した。また、彼は一九〇七年以降、同盟会内部の対立において孫文を支持し、章炳麟、陶成章らと敵対していった。しかし、彼は辛亥革命の現場には居合わせず、依然としてヨーロッパにあって中国の革命に声援を送っていたのである。

一九一一年の辛亥革命の成功は、アナキストたちにより現実的な問題をつきつけることになった。つまり、本来国家・政府権力を否定する彼らの前に中華民国が誕生したのである。第六章は一九一〇―一二年の間にパリから帰国した李石曾、呉稚暉、

張繼らのアナキストとしての立場を扱う。

辛亥革命直後の呉稚暉は、共和制を専制に代わる「較善」として受け入れ、アナキズムに至る過渡期における政党の役割を承認した。彼はまた共和制下の政治と財政の安定を追求するとともに、その体制を支える新しい意識をもった国民を創出するために「知識救国論」を主張したのである。このように呉は、アナキズムの理想を放棄することなく、民国の政治体制を肯定した。

それとは対照的であったのが、パリのアナキストの一員であった張繼の行動であった。一九一一年一月フランスから帰国後、張繼は福建省代表として一九二二年一月成立の臨時参議院に参加し、さらに翌一三年四月の国会では参議院議長に就任した。これら一連の行動は、国家権力を否定するアナキズムの原則に明らかに背くものであった。張繼自身このような理論と行動の乖離を埋める努力をなら行なっていない。嵯峨君は、張繼のコミュニケーション運動への関心の延長線上にあると考えられた地方分権の主張、および国家建設における物質面重視のなかに、わずかにかつてのアナキスト時代の痕跡を見出しているのである。

以上の二人に比べて、李石曾は最も政治について語らなかつた。彼は、一九一二年に呉稚暉、汪精衛らと進徳会を組織し、飲酒、肉食を禁じ、官途につくことを拒否するなど、きわめて禁欲的な綱領を实践しようとした。その目指すところは、新し

い人間を創り出すことによって、現在の社会を変革し、アナキズムの理想社会に向かって進むことであった。著者が、かかる禁欲主義の淵源を、クロポトキンの影響を受けたパリ時代のアナキズムと、中国の伝統である修養に基礎をおく宋代の新儒教主義との結合に求めていることは、本論文全体の論理の展開のなかで妥当な判断といえる。

辛亥革命直後の共和制的民主主義も短命に終り、やがて袁世凱の独裁化の過程が始まる。張繼は、一九一三年三月宋教仁が袁の刺客によって暗殺された事件に対し、七月第二革命に立ち上がり、革命失敗後日本に亡命して、孫文らの中華革命党に参加した。張繼のかかる行動は、まさに彼の民国政治へのかかわりの延長線上にあったといえる。

呉稚暉と李石曾の対応は異っていた。両者とも第二革命に反対する点で共通していた。呉は、袁世凱の「強権に反対するというアナキズムの思想」よりも、袁に代わる人物として張謇や蔡元培を推挙することによって、「伝統的な徳治主義の発想」に基づいた政治的発言を行っていた。それに対して李石曾は、「民主主義の原則から袁世凱に辞職を求めた点で特徴的であった。

宋教仁の暗殺から一九一五年の袁世凱による帝制樹立の試みに至る間の政治状況は、いかなる対応を示したにせよ、アナキズムの理想を実現できる政治環境ではなかった。そこで呉稚暉や李石曾らは、中国の政治舞台を離れ、再びヨーロッパに渡っ



た。中国の变革のための教育を重視する彼らが力を傾注したのは、留仏勤工儉学運動であった。

以上述べてきたことからわかるように、二〇世紀初頭パリでアナキズムの洗礼を受けた中国の第一世代のアナキストたちは、なんらかの形で民国初期の政治にかかわらざるをえなかった。しかし、アナキズムは本来国家権力を否定する思想であり、かかる観点から中国において第一世代のアナキストを批判する人々が現れてきた。第七章でとりあげる劉師復は、そのような批判のなかで指導的立場にあった人物であった。

劉師復（一八八四年〜一九一五年）は、広東省に生れ、伝統的教育を受けたのち日本への留学を果たし、同盟会に参加し排満革命論に傾くとともに、アナキズム思想とテロリズムにも関心を示した。劉の排満革命論の最大の関心は、救国のための精神的支柱の構築にあった。彼は、かかる観点から儒教を批判するとともに、欧米崇拜にも嫌悪感を示していたといわれる。劉師復の求めた精神的支柱とは旧道德の現代的再生であり、仏教から導き出された「嗜欲を絶つ禁欲的生活態度、そして死を恐れない献身的姿勢」がその中核を成していた。かかる態度は、伝統的士人が自らの「修行」によって世を治めていこうとする姿勢に相似するものであった。

劉師復は、一九一一年に清朝高官の暗殺にたずさわり、アナキズム思想にも接しつつあった。しかし、劉が本格的にアナキストに転換するのは一九二二年の初め杭州においてであった、

と嵯峨君は断定する。同君は、当時の状況を詳細に分析するなかで、辛亥革命直後の革命派内部の混乱に対する嫌悪が劉の転換の最大の要因であったことを論証している。

アナキストとしての劉師復の活動の基盤は、一九一二年に設立した晦鳴学舎と心社にあった。晦鳴学舎時代に劉が受容したのは第一世代のパリ・グループのアナキズムであり、したがってその背後にはクロボトキンの思想があった。劉のアナキズムの核心は、「政府こそ強権の最たるもの」であるという命題であった。それは、政府権力とともに政治そのものを拒む論理を内包していた。かかる観点から、彼は一九一三年の第二革命を政治主義として斥けたのである。

劉師復はクロボトキンの『パンの略取』を下敷きにして平等主義的アナキズムの理想社会を描き出している、と嵯峨君は判断する。しかし劉は、「今日から無政府の社会に到達するまでには長期の時間が必要であると述べ、現在を宣伝と鼓吹の時期と見なしていた」のである。彼は、平民学校を作ることを提唱しつつも、あくまで現在の中国人労働者の意識の低さを指摘し、宣伝の主要な対象を知識人としていた。嵯峨君は、かかる劉師復の姿勢のなかに、社会の变革を中等階級としての知識人に託する伝統的士人意識を発見している。

心社は、物資文明の発達にともなう「経済的平等の基礎の上に立ってこそ、人間の本来の道德は發揮される」との認識に基づき、アナキズム実現のための道德を唱導した。その道德は、

かつてのアナキズムと仏教の戒律の結合したものの延長線上にあって、きわめて禁欲的なものであった。かかる観点から、彼は階級、家族、婚姻、政治参加などを拒否したのである。それは、いわばアナキズムが非政治的方法によって政治的目的を達成しようとすることを示すものであった。ここに、辛亥革命後の政治にいろいろな形でかかわってきた第一世代のアナキストに対する、第二世代を代表し、理論的にはアナキズムの原理により忠実であろうとする劉師復の批判があった。

第八章は結論部分にあたる。嵯峨君はこれまで展開してきた諸章の論旨をいま一度ここでまとめている。分析対象は辛亥革命前後の中国人アナキストの思想と行動にある。著者の視点は、西洋起源のアナキズム思想が中国へ移植されることによっていかに変形されるかという点にあった。嵯峨君は変形の要因として中国が当面する政治的課題と伝統思想をとり出している。これら二つの要因は妥当であり、本論文のなかで一貫してとりあげられている。焦点は、権力否定を原理とするアナキズムと中国の民族主義・国民国家との矛盾をどのように把握するかにあったのである。

本論文は、わが国における最初の体系的な中国アナキズム研究である。その意味で、本論文はわが国の中国近代政治史研究のなかで確固たる地位を築いたものとして、高く評価される。ここに収められている諸論文は、すでに『法学研究』、『アジア研究』などの学術雑誌に発表され、学界においても高い評価を

受けている。また、嵯峨君には、本論文以外に玉川信明・坂井洋史両氏との共編になる『中国アナキズム運動の回想』（総和社、一九九二年）、および本年出版を準備している『劉師培伝』がある。

本論文において残された問題がないわけではない。第一は、劉師培の思想的転変の問題である。嵯峨君は、一貫する文化的保守主義との関連で劉の思想的立場の変化を説明するのに成功している。しかし、なぜ劉が思想的立場を変えたのか、その動機づけと政治過程との関連が必ずしも明らかではない。嵯峨君はこの問題の解明を試みていないわけではない。しかし、そこには資料的限界もある。かかる資料的限界を意識しつつも、今後この方面に一層の努力を払うことが望まれる。

第二は、劉師復以後のアナキストが直面したいくつかの重要な問題である。嵯峨君は、結論において、劉師復らが第二世代のアナキストとして、第一世代から五四運動以後の第三世代へ橋渡しの役割を果たしたことを示唆している。五四運動の時期において、後にマルクス・レーニン主義者になる多くの若い青年たちがアナキズムの影響を受けていた。したがって、アナキズムとマルクス・レーニン主義との遭遇の問題は説明されなくてはならない。さらに、ここでとりあげられた李石曾、吳稚暉、張繼らの第一世代のアナキストは、やがて一九二〇年代の国民革命において、国民党右派として反共主義の立場に転じる。そうであるとすれば、アナキズムと反共主義との関連も明らかに

されなくてはならないであろう。

本論文は以上の未解決の問題を残しつつも、中国近代政治史の研究に新しい分野を開拓したものとして、審査員一同博士（法学）（慶應義塾大学）を授与するに値するものと判断する。

平成六年一月三二日

主査 慶應義塾大学法学部教授  
法学研究科委員法学博士

山田 辰雄

副査 慶應義塾大学法学部教授  
法学研究科委員法学博士

小田 英郎

副査 慶應義塾大学名誉教授法学博士

石川 忠雄